

沈黙に向き合う

沖繩戦聞き取り47年

石原 昌家

(13)

この連載の第12回「伊是名島虐殺事件④」が2月16日に掲載されると、記事を読んだ伊是名島出身の教え子から電話があり、44年目にして初耳の情報を寄せてくれた。

教え子は私が40数年前の講義で伊是名島虐殺事件について触れたときに受講していた。講義が終わった後、伊是名島出身であることを名乗り出てくれ、以来、私の戦争体験の聞き取り調査で、貴重な協力者になつてくれた。

元「巡査」の妻は島出身 今回の電話で教え子は、私に脅迫を繰り返してきた元「巡査」の妻が伊是名島出身者だったことを教えてくれた。元「巡査」は本島出身で、島人から虐殺に関与したとの汚名を掛けられ、本

元「巡査」はこんなことを言っていた。「妻がお前の新聞記事を読んで病気になるってしまった」「自分の子どもが将来、証言した人間の子弟と姻戚関係を生じることはあってはならない」

伊是名島虐殺事件 ⑤

島にタブー、真相阻む

証言公表の判断で葛藤も

伊是名島出身であることにはひと言も触れていない。教え子はその理由をこう説明した理由から「裏切

最初の犠牲者は島に漂着した米兵だった。殺害を主導したのは宮城太郎という偽名で伊是名を伊平屋を行き来していた陸軍中野学校出の県外出身の「特務教員」だった。

仲田精昌さんの著書「島の風景」を読み直して、あることに気付いたという。仲田さんは事件を目撃した島人の立場でこの本を書いているが、元「巡査」の妻が伊是名島出身であることにはひと言も触れていない。

証言者から聞き取った内容の全てを公表できるとは限らないことを学生たちに言いつけていた。「ごまかすかの判断の見極めこそ、その人の見識が問われる問題だ。驚かへき証言を得られても、何もかも公にできるものではない」と繰り返して説いてきた。

私には仲田さんからこうした証言を自宅に聞いていた。そこに外出していた妻が帰宅した。仲田さんが私に話している内容を耳にした妻は驚いたようだ。妻は私に悟られぬよう、背後で仲田さんに対して、この話を口外しないよう無言のまま合図を送ったようだった。

「巡査」が戦時中、島の人々をいかに困らせてきたかを口にしてきた。しかし妻が伊是名島出身だという事実を耳にすることはなかった。私自身が元「巡査」本人に強い関心を寄せ、妻まで思いが至らなかつたからかもしれない。

妻は島出身だと教え子から聞かされ、元「巡査」が話していた言葉のいたるところに、思い当たる節が浮かんで来た。

私は仲田さんからこうした証言を自宅に聞いていた。そこに外出していた妻が帰宅した。仲田さんが私に話している内容を耳にした妻は驚いたようだ。妻は私に悟られぬよう、背後で仲田さんに対して、この話を口外しないよう無言のまま合図を送ったようだった。

(次回15日掲載)